

通巻300号を迎える今年、ひと月おきに年間特集「木の国日本」をテーマとする。

- 1月号 「山を生きし続ける」
- 3月号 「木の流通を再生する」
- 5月号 「木造建築の構造・工法」
- 7月号 「木の国・木の文化」(通巻300号)
- 9月号 「木材利用の伝統と新しい技術」
- 11月号 「木と職人事情」

1月号は第一段として、山里の林業に踏み込む。

このままでは、日本の山も木も里も、みんな死んでしまう——。

果たして、ここまで来てしまった現代社会に、山の再生への道は残されているのだろうか。

もしそれがダメだといわれても、たとえその道が八方塞がりであっても、われわれはその道を探さなければならない。それがわれわれの使命である。

心ある山人がどのように山を愛そうと、あるいは心ある里人がどのように山を愛そうと、バラバラの、そして単独の思いだけでは、膨大な面積の山の荒廃を止めることはできない。

育てるためには、使う経済がなければならない。生き生きとさせるためには、山と人々の生活が結ばれなければならない——。

この10~20年、産地直送や林業そのものへのこだわりなど、全国各地でさまざまな取り組みが見られてきた。そこには一定の成果を見ることもできたと思う。

しかし、ごく一般的な里山には、すでに山を知る人々が存在しなくなってしまう。すっかり山が動かなくなり、荒れ放題となっている。

このような状態に対して、改めて一般市民が危機感を抱き始めできた。消費者の目が山に向き始め、海山の漁民たちまでが山に登り始めた。

今、山は新たな可能性を持ち始めている。そのわずかな動きをしっかりと捉えるため、この誌面を使って取り組んでみようと思う。

(特集担当編集委員/丸谷博男・林工)

小さな山村・

エコビレッジ諸家の挑戦

矢房孝広

◎矢房孝広(やふさ・たかひろ)
諸塚村企画課課長補佐 エコミュージアムもろつつか
館長 諸塚村産直住宅プロジェクトチームリーダー

森林理想郷から 全村森林公園を目指して

宮崎県諸塚村は、九州山脈の奥深く、天孫降臨伝説の地・旧高千穂郷の一角にあります。村民三三〇人、七九三世帯が、標高一五〇〇〜八〇〇mに点在した八八の集落に暮らす森深き山村です。千m級の急峻な山に囲まれていて、宅地はわずか一%。村土の九五%を占める山林の九八%が民有林ですが、大規模林家は少なく、所有山林面積一〇〇〜五〇haの家族労働的な中規模林家が中心になっています。しかも、村外に住む不在山主もほとんどなく、手入れが行き届いた、スギ、ヒノキの針葉樹とシイタケ原木となるクヌギ、ナラの広葉樹を混交して植樹しているモザイ

ク林相と呼ばれる森が広がっています。水質保全と小動物の生息地にもなっている環境にやさしい美しい森です。自らの村に誇りを持ち、山と共生する村づくり＝森林理想郷づくりに取り組んできましたが、二二世紀を見据えた第四次総合長期計画では、一歩進んで村全体に広がるこれらの自然の資源をまるごと生かそうという全村森林公園化構想を、大きな柱に据えています。

厳しい山村経済

戦中戦後の北九州の電力需要を支えた諸塚ダムが一九三〇年代に完成するまでは、ここは車道もない秘境で、隣接する椎葉村ともに「陸の孤島」でした。水田もほとんどなく、

炭焼きや猟師、勅許を得て原生林の大木を伐って椀や漆器をつくる木地師などが生活していました。急峻な山林の多くは食料を得るための焼畑になっており、平地の農耕民族とは全く違う、森の恵みを生かした独自の山岳文化を築きながら暮らしていたようです。

山林の生産力の弱さから、宮崎県下一の貧乏村と言われた時期もありましたが、昭和三〇年代に林業、シイタケ、茶、牛を四大基幹産業として位置づけて、家族単位の農林家でそれらを複合的に経営する手法が成功し、村づくりのキャッチフレーズは、山に生きる「林業立村」となりました。この「家族経営的林業」は、当時の日本林業の担い手として脚光を浴びていました。特に、シイタケは栽培の発祥の地とも言われていて、昭和五九年には一〇億円近い生産高を上げるなど、単独市町村としては奇跡的な成果を見せ、肉厚の風味豊かな原木シイタケとして全国的に名をはせました。

しかし、戦後地道に築き上げてきた小さな山村経済も、激動の時代を迎えています。ご存知の通り、シイタケも外国産による価格破壊の波に

飲まれて大きく失速し、頼みの林業も、原木価格は一万円/mを辛うじてキープするまで落ち込み、ピーク時の三分の一近くまでになっていきます。木材の搬出経費がおおよそ一万円/mとなることを考えると、二世帯も前から数十年間投資し続け、大事に育てた山林という資産が、ほとんど収益なしで伐採とともになくなることになるのです。なんとも言いようのない無力感に苛まれます。

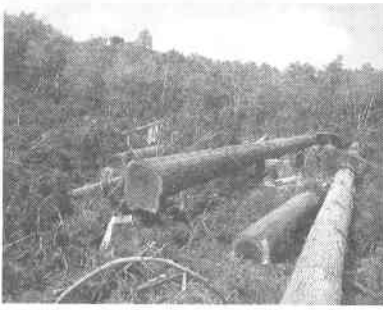
材価が安いからと言って、山を伐らずに我慢できる大規模林家は少なく、必用な現金を得るためには、当然伐採量を増やさなければなりません。伐採した山林は、地拵えし、また植林をし、その後は夏の下刈り、除間伐と、大変な労力が発生します。後継者のいる林家にしても、家族の労働力を越えた大きな負担を抱えるような伐採をするわけにはいきません。山と共生して営まれてきた複合型林業のバランスが崩れてしまうのです。

全国的に見ても、近年の木材価格の低迷で、兼業林家が儲からない山の経営から手を引き、山の手入れをしないで荒れた「放置林」が多くなったと言われます。さらに、この数

年の暴落によって、大規模な林家までもが山林を伐採し、その後植林しないで山を棄てるという、もっと深刻な「放棄林」が増えていると聞きます。

諸塚村方式産直住宅の試み

諸塚村では、そんな森の貴重な資源を、都市の方と共に守りながら育てて行こうと、産直住宅プロジェクトを試みています。木材などの森林資源や自然、地域の文化を生かしながら、都市と山村との独自の交流を図ることで、山村の人々が自信を持って生活して行く基盤をつくらうというエコビレッジ諸塚プロジェクトがベースです。ここでは、つくられた「ためのイベント」はしません。



葉付自然乾燥材

自然素材を使った家づくりの提案や、山村生活の体験など地域資源、地場の素材をそのまま活用した企画をして、その交流の中で山村文化を再評価する作業を意図的に行い、単なる素材の直売や観光開発に終わらない、人にも地球にも優しい生活提案型の交流運動の展開を図っています。その積み重ねで、地域の人々が自らの地域社会を研究し、自らの未来を自ら創造するようになることが最終目標です。

諸塚村産直住宅の取り組みにおいて一番の課題は、品質管理です。われわれ生産者がユーザーと直接接する場合の最大のメリットは、価格ではありません。ユーザーが本当に必



木材産地ツアー

用としている素材は何かをはっきりと理解でき、生産品の問題点を瞬時に把握できることです。

産直住宅を始めるまでは、市場では全く評価されないからと、乾燥材の重要性の認識が薄かった加工センターメンバーも、自ら積極的に製品の改良に取り組むようになりました。建築の現場が本当に求めているのは、きれいな無節材よりもしっかりとした乾燥材であるのがわかったのです。葉付自然乾燥木材（いわゆる葉枯らし材）の取り組みも、林業家の若手の中から、出てきたものです。色目、艶が良い木材の生産も、生産者の意欲、ユーザーのニーズと、それを使いこなすネットワークがあつて初めて成立します。山から町に



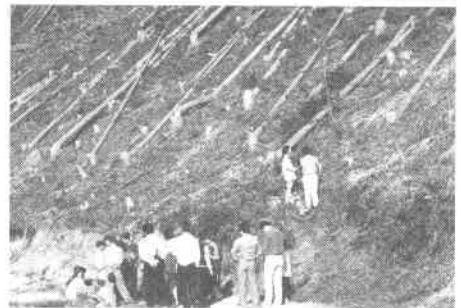
諸塚村産直住宅モデルハウス

出向き、林業家が直接ユーザーと会話を交わすことによって、生産者にもっとも大事な品質管理意識が生まれてきています。

九州の家づくりとは

諸塚村産直住宅は、九州地域限定としています。ユーザーとの顔の見える関係構築には九州圏内が限界であるのと、家づくりは地域の木材を使うべきという身土不二の考え、そして無駄な輸送エネルギーを使わない環境共生の考え方によるものです。

昔から民家は、人々の生活に根ざしたその地域にある素材が採用され



木材産地ツアー

ていて、周辺の自然と一体化しています。たとえば、縄文時代は茅葺きよりも、当時大量にあったクリの木と土で屋根を葺いていたそうです。

室町時代は水田開発により森林破壊が進み木材が不足していたため、竹と土を多用した家づくりが発達したようです。諸塚村でも江戸期は、スギ皮葺き屋根や茅葺きでもクリの木でできた千木やカツオ木を乗せた民家が多くあつて、これらは山岳地域にのみ見られるそうです。つまり、民家は人の快適な生活だけを求めてつくられたものではなく、地域の特性、環境に応じて進化してきたものです。環境に適応することを第一にしてきた人間の知恵の結晶ではないでしょうか。

九州の林業は、一部の例外を除き、その多くが戦後の拡大造林の山林をベースにしています。しかも高度成長期にもはやされた伐期の短い早生系のスギが主です。これらの戦後造林された材が、今後相当数市場に出ることになります。

諸塚村方式産直住宅の家づくりも、九州の山で育った材料を使う環境共生型自然派住宅を提案しています。適材適所で、小量ながらも年間

一定量は確保できる六〇〜七〇年生の高齢級材や、下地材などに使う若年の間伐材を織り交ぜながらも、中期的には、安定的に供給できる四〇〜五〇年生のスギを使います。これが九州の家づくりの主力になるべきだと考えるからです。

むらづくりと家づくりネットワークの融合

諸塚村の村づくりは、拡大生産、成長第一主義とは一線を画し、生活の安定、家族単位をベースとした適切な経営規模の構築が最大の目標です。それが持続可能な山村経営の手法ではないでしょうか。その考えに基づき、諸塚村の産直住宅の将来計画は、木材の年間成長量を上回らない木材素材生産量を考慮し、諸塚加工センターの製品生産量の約一五％にあたる年間二〇〇〇m³(約五〇棟)の供給を目標にしています。ただしここ数年は、加工センターの品質管理と素材生産体制の限界から、年間供給木材積五〇〇m³(一二棟)の限定供給体制をとっています。

前述のように、小さな山村が、産直住宅に取り組むにあたっての最大の課題は、品質管理です。そのため

には、建築現場を理解し、いかに技術に精通した木材生産体制が構築できるかが大事です。国産材であれば、どんなものでも使ってくれるほど、ユーズーや建築現場は甘くはありません。しっかりと乾燥木材はもちろんですが、生き物である木材を扱う以上、材のくせや木取りなど、大工さんと綿密に打ち合わせしながら進めていくことが不可欠でしょう。

建築家や工務店さんには大変な手間と時間をとらせるやつかいなものですが、生きていく木を扱う以上、どうしても必要な作業は増えてきます。現在、諸塚木材加工センター内に産直住宅部材専用のストックヤードを整備し、それらを活用して、規格材による標準型住宅も視野に入られ、効率的で品質や価格の安定した木材供給体制を構築する準備に入っています。

山村と都市との諸塚村産直住宅は、九州各地の賛同者ネットワーク組織の強力なバックアップで成り立っています。ネットワークと協力して、定期的に木材など自然派の家づくりセミナーや木材産地ツアーを開催し、すでに一〇〇〇名近い方が諸塚の山林を訪れ、山村にやすらぎ、

村人とふれあう機会をもっています。

これらの山村と都市とのネットワークが拡大・展開されることで、林業家たちも都市の方々と交流できる貴重な機会が得られています。山のことを思ってくれる人たちがたくさんいることを知り、自分が育てて製材した材で家がつくられる喜びを得て、木材生産のプロとしての意識を高めることができるのです。今までのように、木材を伐採して市場に出して終わるのではなく、家づくりを通じて縁のできた人たちと協力して森を守る運動を抜け、そして次の世代へ貴重な資源を残し、育てようという意欲が持てる。そんな継続的なネットワークによる都市との交流で得たこれらの貴重な体験は、今後のむらづくりに生かされ、きつと大きな実を結ぶと信じています。